

曾於文藝

俳句

千草俳句会

すいれんの白の際立ち池広し

児玉 タエ子

舟の波解きては結ぶ花筏

田之上 千代子

とび交ひて蝶の学園苑の池

今村 久子

大隅俳句会

窓辺にて夏めく風に髪を梳く

穎娃 晴美

軒垂ぼとりと落ちて梅雨に入る

河南 ミホ

老鶯の訪れ遊ぶ里の宮

岩重 みどり



雨中の田植え (櫛小学校)

短歌

末吉短歌会

ゆっくりともっとゆっくりと

過ぐるべし手術控えし春の十日間

田之上 絹子

不機嫌なひよどりの声中空に

初夏と言ふにキミもつらいか

長倉 佳津子

ハンガーにいびつに架かるブレザーは
昨日のストレス引きずりてゐる

宝蔵 弘二

大隅短歌会

杉の秀^ほにからみて咲ける藤の花

天空に吹き風と遊べり

伊勢 タミ子

患いて手入れ届かぬ君子蘭七鉢

すべて咲きてくれたり

吉崎 フサ子

散歩する日毎の姿そのままに

歳相応の影を写しぬ

加塩 秀子

財部短歌会

一口に躑躅と言へど散るもあり
咲き誇るあり人の世もまた

瀬戸口 芳子

みずみずし若葉の香る遊歩道

行き交ふ人の声もさわやか

川俣 若

腰痛の悩みもとけて旅にでる

我がゆく先に春の風舞ふ

井上 澄子

指先にそつと身を置きし揚羽蝶

ふ化したばかりの羽は壊れそふ

児玉 次雄

はつ夏の光を浴びて競ふがに

日に日に伸びる庭の若草

杉村 リカ

新緑のけやき並木は心地良し

私の煩惱うすめてくれぬ

祝迫 道雄

風かおり誇らしく舞うのほりみれば

見知らねどその子よすこやかにと思ふ

山城 忠

愛知には子六名孫二十一名曾孫

幾人になるのやら米寿祝ひぬ

橋口 貞男

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

煩ね農作業 蛙の寝床も

削つ切つ 大窪 英与

千し物ぬ 取入めちやれ

蛙ちや鳴れつ 桐野 奈世

仲良態の 夫婦蛙つ妬ん

独い者 森山 厚香

蛙の如つ 漸と臨月腹れ

嬉し嫁 鈴木 一泉

大隅薩摩狂句会

田舎店 氣持っじやんさち

少す添え 福元 多喜子

薬ゆ待つ 合間め病氣ん

友人す見舞つ 小倉りんりん

休憩の 合間め観客か

ごそつ減つ 西山 美代子

焼酎くれが 仕事合間めも

一杯飲つ 山田 竜生